

# 衣裳人形にみる民族衣裳の確立（日本編）

青木 愛子

## はじめに

世界のどの民族にも古くから人形が存在している。その多くはその民族の衣裳を身に着けている。国と国との交流が未だない時代からすでに人形が存在していることに注目せざるをえない。

顔をつくり、髪を結び、美しい衣裳を身にまとった人形は愛玩というよりは鑑賞用として大切に扱われていたものと思われる。それらは、衣裳人形として伝承され、布の模様や材質は時代と風土にて培われ、日本の四季折々の衣裳を身につけた人形の数は世界に類を見ないのではないかと推察する。各時代の衣裳人形の歴史から民族衣裳の確立について考察する。

## 縄文・弥生式時代の衣裳人形

縄文・弥生式時代の土偶が発見されており、呪術に使われたとされているが、レースのような美しい衣裳とみられる模様が施されている。(図1)

呪術用であれ、死者とともに埋葬されたものであれ、その時代の最高級品を身につけた衣裳人形と推察する。死者に対する日本人らしさを垣間見る。



【図・1】

## 古墳時代

埴輪に当時の衣裳がうかがえる。当時の豪族たちの墳墓であり、発掘された埴輪には男女の区別がありその衣服・装飾品などから貴人・武人・巫女・農民など推測される。

(図2)は、古墳時代後期の巫女の埴輪。

髻をきりりと高く結び上げ、季節の草花を簪にした。四季折々の花を髪に飾るところなど、現代の祇園の舞妓の髪飾りに似ており、日本人らしさがうかがえる。

現存する埴輪は、土焼のものであるが、他に木彫りや象牙などもっと多様な材質のものがあったのではないと思われる。風化・腐敗などにより滅亡したものとする。

埴輪の用途は、死者が寂しくないように一緒に埋葬されたものであり、見て楽しむものではなかったが、耳飾りとブレスレットをつけ華やかである。現代においても、女性の



あぐらを組み  
合掌する男子 祭具を掛けもち  
座る巫女

【図・2】

棺に人形が添えられる事がある。

## 飛鳥時代

聖徳太子が摂政として活躍した推古天皇の時代（6世紀半）、日本の風俗を『隋書倭国伝』で知ることができる。それによれば、古墳時代の埴輪と同じ衣裳であることがうかがえる。

## 奈良時代

奈良時代には、中国・唐との交流が盛んになり、唐風の影響が濃厚で、特に女性の衣裳が豪華な唐風であったことは言うに及ばず、そのモデルとなったのは、唐で作られた衣裳人形ではなかったろうかと推察する。遣唐使が持ち帰ったお土産の中に唐の衣裳人形があり、ファッションモデルの役目を担ったのではないかと推察する。

## 平安時代

平安時代の人々も人形を作っていたと思われる。土偶・埴輪の材料で作られた類の物は残っていただろうが、紙や木などの材料で作られた人形は焼失、風化、腐敗等により消滅してしまったと思われる。

人形は残っていないが、『源氏物語』『枕の草子』『栄花物語』『うつぼ物語』などの書物に「ひいな遊び」の様子が記されている。この人形は「ひとかた」のような紙で作られている。貴族の子女が宮廷貴族社会のままごと遊びをして楽しんでいるようすがうかがえる。

しかしながら、当時“紙”は貴重品であり、庶民の手に容易にはいるはずがなく、代わりに草や木などで人形を作っていたのではないかと推察する。

平安時代の末期に不吉を払い幸せを祈る宮咩祭（みやのめのまつり）という行事があり、祭神の男女の人形を作り、布の衣裳を着せたと記されている。これが、後の雛祭りの始まりではないかといわれている。

やがて、戦乱の時代（鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代）が長く続き、平安時代に作られた人形など全て焼き尽くし残らなかったと推察する。

## 江戸時代

江戸時代になると人形に関する記録や書物など数多くあり、作品も多く残されている。戦乱の時代が終わり、世の中が平和になり、産業の発達にともない庶民の暮らしも良くなった。余裕がうまれると文化が発達する。浮世絵師が描いた美人画・役者絵を真似て人形師が立体的に創作する。それを買い取ったり、保護したりするパトロンのような豪商があらわれた。鼻眞の役者や馴染みの若衆・遊女に似せた人形を作らせ、衣裳を着せ替えたりして楽しんだ。

江戸の文化は『粹』を好み、結髪、櫛簪、小袖や打掛の着方、帯の結び方など当時の流行（ファッション）が衣裳人形を通して知ることができ、風俗資料としても重要である。

江戸時代につくられた人形の種類を挙げると 13 種類に及ぶ。土人形・姉様人形・人形操り・人形からくり・御所人形・三つ折れ人形・衣裳人形・加茂人形・奈良人形・嵯峨人形・雛・武者人形など江戸時代後半には人形の歴史において黄金時代であった。これらの人形は、人形浄瑠璃や祭礼山車で、興行や祭りを賑やかに彩り人々を喜ばせた。

ところで、衣裳人形を語るうえで、人形の顔立ち及び姿を稚拙な文章ではとても現す事が出来ないので、私の指南書である『人形第 2 巻 嵯峨人形・賀茂人形・衣裳人形 紫紅社編 京都書院発行』を図書館で閲覧していただければ、姿の美しさと当時を物語る衣裳に日本民族の精神的奥深さと美意識の高さに共感されると思う。

## 明治時代

明治維新に五節句は幕府による旧習だとして政府から『五節句廃止令』が出された。特に江戸時代の中頃に作られた武者人形（五月節句）などは、旧物とされ破壊の対象となり、多くの美術人形（衣裳人形）が失われた。

江戸時代に作られて明治・大正と受け継がれた三つ折れ人形（抱き人形）について、私の母（大正 2 年生まれ）から聞いた事がある。その人形たちは母の祖母が持っていたもので、頸と手足が動き、衣裳は季節に合わせて着替えさせる事が出来、箆笥の中にはいろいろの着衣がぎっしりと入っていた。他に鏡台やお針箱、丸髻などの鬘もあり、髪型を変えることも出来たそうだ。しかし、人形に興味を持たない母と叔母から従姉妹へと譲られ、私は、実物を見る機会を失った。この人形が後に『やまと人形』とよばれるおかつば頭の人形の始まりである。

## 大正・昭和（戦前）

大正の終わり頃から昭和の初め頃にかけてフランス人形（洋装）を作って飾る事が流行した。フランス人形の衣裳は胴から下をフレームにしてペチコートで張りをもたせたフリルのスカートが華やかで愛らしい。西洋文化に憧れる女性の間で瞬く間に広まっていった。

一方、日本人形についても新しい技法がうまれた。竹久夢二<sup>(1)</sup>の美人画をモデルに人形を作成する女性のグループが誕生し、創作人形を発表する展覧会が催され抒情的な風俗人形が流行した。のちに、衣裳人形によって重要無形文化財保持者の認定を受ける（人間国宝）堀柳女<sup>(2)</sup>（明治 30 年生まれ）もまた竹久夢二に憧れ、女書生として夢二のアトリエに出入りし、創作技法に大きな影響を受けた一人である。

また、同期に人形によって重要無形文化財保持者の認定を受けた平田郷陽<sup>(3)</sup>（明治 36 年生まれ）は、初代平田郷陽の長男として生まれた。父は活人形の製作者であり、父と交流のあった松本喜三郎、安本亀八、山本福松ら活人形師の仕事を見て育つという恵まれた環境にあった。

堀柳女は、昭和 5 年に竹久夢二のどんたく社展に『袖』『幌馬車』を出品し、その後も多くの作品を発表している。平田郷陽もまた、昭和 5 年に白沢会第 3 回展に『静春』を出品

し多くの作品を発表している。

大正から昭和の人形作家として創作活動をしてきた二人は共に東京生まれで 2 回にわたり大きな災難に遭っている。大正 12 年 9 月 1 日関東大震災がおこり、死者 9 万 9000 人、行方不明者 4 万 3000 人の犠牲者が出ている。マグニチュード 7.9 の地震による災害で、東京を中心に甚大な被害がでた。当時、堀柳女は 20 歳、平田郷陽は 14 歳ごろであり、すでに人形創作をはじめているはずである。次は、昭和 20 年 3 月 10 日東京は大空襲に遭い焦土となった。堀柳女は 48 歳、平田郷陽は 42 歳ごろであり、創作人形を美術工芸の位置まで高めた巨匠として広く世に知られている。平田郷陽は岡山に疎開して創作している。人形も疎開したと思うが、全て疎開先に運ぶことは不可能であっただろうと思う。戦災により多くの人形が焼失したと推測する。

巨匠の人形は芸術品として守られたかもしれないが、フランス人形に対抗して作られた『夢二人形』は手芸品として扱われており、戦火の中に消えていった。戦争は大正ロマンを伝えてくれる衣裳人形を焼き、フランス人形は敵国のものとして捨てられた。

## 昭和時代（戦後）

戦争が終わった昭和 20 年代から 30 年代の人形事情について上手く表現されている幼児絵本があるので原文の一部を載せ、当時子どもだった私が見た人形史の変遷を証明する。

『 ゆきちゃんは、あやちゃんのおにぎょうさん。あやちゃんのおかあさんが  
こどものころきていた、かすりのきものきれでこしらえてくれた、  
かわいいおんなのこ。でも、ゆきちゃんは、もうずいぶんながいこと、  
くまさんやあひるさんたちと、せまいかごのなかで、まいにちくらして  
いました。』

このごろ、あやちゃんは、カールにぎょうのかーるちゃんやミルクのみ  
にぎょうのめりーちゃんとばかりあそんで、ゆきちゃんとは、ちっとも  
あそんでくれないからです。<sup>(4)</sup>』

昭和 20 年代の女の子たち（未就学児）は、人形で飯事遊びをした。母親が赤ん坊をおんぶしている様子を真似て背中に大きな人形をくくり付けて宮の境内で遊んだ。人形は祖母や母の手作りで、ゆきちゃん人形のように緋の着物など地味な色合いの服や着物を着せてもらっていた。

昭和 30 年代に入り、金髪の青い眼をしたカール人形やミルクのみ人形（ゴム製品）といった抱き人形が登場し、木綿の手作り人形たちはしだいに姿を消していった。

また、抱いたり、背負ったり、衣裳の着せ替えをして遊ぶ人形に『やまと人形』がある。この人形は江戸時代に生まれ現代までひろく愛されている。この『やまと人形』は今日で

は飾っておく人形として大切にされ、母から娘へと受け継がれていく。

この人形は、別名『市松人形』ともいうが、昭和に入り『やまと人形』とも名づけられている。男の子の人形と女の子の人形が作られており、衣裳は人形用に染織、刺繍を施されたものが使われている。下着から上着、帯など着付けも忠実に行われている。扇子や紙入れなどの持ち物も衣裳にあわせて贅をつくしたものであり豪華である。

このように民族衣裳（和装）で着飾った『やまと人形』は親善大使として海外に贈られている。女の子の人形には、平安時代の雅（みやび）さがあり、男の子の人形には江戸時代の粹（いき）な趣がある。『粹』と『雅』こそ日本人の精神と美意識であり伝統文化の中で受け継がれていくひとつの方法として『衣裳人形』の負うところは大きい。世界の人々に日本の民族衣裳の美しさを永く伝えてくれることを願う。

### おわりに

怪談話（恐怖体験）などで怨霊に憑依された人形がしばしば登場する。人形（ひとがた）のものには魂がはいりやすいから気をつけろとマコトシャカに言い伝えられている。また、人形の眼はおよそで見ると見つめられているように見えるが、近づいて見ると遥か遠くを見ているようで焦点が合わないと人形を嫌う人もいる。私は怨霊に憑依された人形にまだ会ったことはないので何とも言えないが、人形が見ているものは遠い昔に自分を創りだしてくれた人。可愛いがり、愛しんでくれた人を思い出し遥か遠くを見ているからだと思う。宝鏡寺（京都府京都市上京区寺之内通堀川東入百々町 547）は『人形寺』として名を知られている尼寺で人形塚が建っている。石碑の台石に刻まれた言葉こそ人形の本質を表していると思う。（図 3）

人形よ誰がつくりしか  
誰に愛されしか知らねども  
愛された事実こそ  
汝が成仏の誠なれ  
(武者小路実篤)



【図・3】

## 注

- (1) 竹久夢二 (たけひさ ゆめじ) : 日本画家・詩人・挿絵画家。美人画が多く抒情的な作品は「夢二式美人」と呼ばれた。大正ロマンを代表する画家で「対象の浮世絵師」と称された。(1884-1934)
- (2) 堀 柳女 (ほり りゆうじょ) : 人形作家。竹久夢二の影響を受け、創作人形を始めた。第1回帝国美術院展覧会(帝展後の日展)に『文殻』を出品し入選。人形作品を美術工芸の位置に高めた。1955年(58歳)衣裳人形の重要無形文化財保持者に認定された。(1897-1984)
- (3) 平田郷陽 (ひらた ごうよう) : 人形作家。木目込みの技法をもちいた衣裳人形を創作した。改組第1回帝展に『桜梅の少将』を出品し入選。1955年(52歳)衣裳人形の重要無形文化財保持者に認定された。(1903-1981)
- (4) 川尻泰司 作・画 こどものとも -ゆきちゃんのせかいりょこう-  
福音館書店発行 1960年 P. 2

## 参考文献

- 1) 岡田 譲 : 堀 柳女 (人間国宝シリーズ 35) 講談社発行 1977年
- 2) 岡田 譲 : 平田郷陽 (人間国宝シリーズ 36) 講談社発行 1978年
- 3) 切田健/市田ひろみ : 京都染織まつり記念図録 「写真でみる日本の女性  
風俗史」 京都書院発行 1985年
- 4) 切田 健 : 人形 第2巻 「嵯峨人形・賀茂人形・衣裳人形」  
京都書院発行 1985年
- 5) 橋本澄子 : 日本の髪形と髪飾りの歴史 源流社発行 1998年